

一般演題（ポスター）

■ 2025年11月14日(金) 14:20～14:55 ■ ポスター10

[P20] 一般演題（ポスター） 20 症例・直腸2

座長：能浦 真吾(堺市立総合医療センター・消化器外科)

[P20-1]

直腸間膜内に卵巣癌由来リンパ節転移をきたした卵巣癌と直腸S状部癌の重複癌の1例

岩崎 崇文, 佐々木 教之, 琴畑 洋介, 瀬川 武紀, 八重樫 瑞典 (岩手医科大学医学部外科学講座)

[P20-2]

妊娠中期に診断され妊娠中に術前化学療法を行った直腸癌の1例

久保 陽香, 山本 大輔, 齊藤 浩志, 道傳 研太, 崎村 祐介, 齋藤 裕人, 辻 敏克, 森山 秀樹, 木下 淳, 稲木 紀幸 (金沢大学附属病院消化管外科)

[P20-3]

経肛門・経会陰アプローチによる直腸GIST・直腸膀胱瘻手術

佐村 博範, 新垣 淳也, 堀 義城, 山城 直嗣, 藤井 克成, 宮城 由依, 原田 哲嗣, 本成 永, 金城 直, 伊禮 俊充, 亀山 眞一郎, 伊志嶺 朝成, 長嶺 義哲, 古波倉 史子 (浦添総合病院)

[P20-4]

膣ヒアルロン酸注入療法により発生した直腸肛門部合併症の3例

新谷 裕美子, 大城 泰平, 井上 英美, 西尾 梨沙, 古川 聡美, 岡本 欣也, 山名 哲郎 (JCHO東京山手メディカルセンター大腸肛門病センター)

[P20-5]

超音波内視鏡下経直腸的ドレナージによる骨盤内膿瘍の治療が奏功した2例

北浦 良樹, 王 佳雄, 長尾 晋次郎, 持留 直希, 豊田 秀一, 石川 奈美, 土居 布加志 (大阪回生病院)

一般演題 (ポスター)

2025年11月14日(金) 14:20 ~ 14:55 10 ポスター10

[P20] 一般演題 (ポスター) 20 症例・直腸2

座長：能浦 真吾(堺市立総合医療センター・消化器外科)

[P20-1] 直腸間膜内に卵巣癌由来リンパ節転移をきたした卵巣癌と直腸S状部癌の重複癌の1例

岩崎 崇文, 佐々木 教之, 琴畑 洋介, 瀬川 武紀, 八重樫 瑞典 (岩手医科大学医学部外科学講座)

【はじめに】婦人科領域では卵巣癌の直腸浸潤もしくは腹膜播種による浸潤のため、腸管の合併切除が必要となることがある。今回、卵巣癌の腹膜播種による直腸浸潤と直腸S状部癌の重複癌に対して手術を行い、術後の病理検査で卵巣癌の直腸間膜リンパ節転移が明らかになった症例を経験したので報告する。

【症例】65歳、女性。X-1年3月に下腹部痛を主訴に前医を受診し経膈超音波検査で卵巣腫瘍を認めたため、精査目的に当院産婦人科へ紹介となった。MRI検査でダグラス窩に16mm大の造影効果のある充実成分を伴う腫瘍を認めた。一時通院を自己中断したのちに同年11月に再来し、CTガイド下生検より卵巣癌の診断となりX年1月より術前化学療法(パクリタキセル/カルボプラチン療法)が開始となった。治療経過中に行われた下部消化管内視鏡査で直腸S状部に半周性の2型腫瘍と直腸S状部から直腸Raにかけて卵巣癌による圧排所見を認めた。以上より卵巣癌(IVB期)と直腸S状部癌(cT3N1aM0 cStageIIa)の重複癌の診断となり、産婦人科で術前化学療法を4コース行い、同時切除目的に当科へ紹介となった。同年6月に開腹下で卵巣癌に対して子宮単純全摘術と両側卵管卵巣摘出術と回盲部切除、直腸S状部癌に対してHartmann手術を行なった。術後経過は良好で術後16病日に自宅退院となった。病理結果では直腸間膜内のリンパ節転移を認めるも卵巣癌の転移であり、卵巣癌・直腸間膜リンパ節転移(IVB期)と直腸S状部癌(pT3N0M0 pStageIIa)の診断となった。以降は当院婦人科で化学療法を継続している。

【まとめ】卵巣癌による直腸への直接浸潤や播種浸潤による腸間膜リンパ節転移は、卵巣癌の予後不良因子や肝転移のリスクとして報告されている。腸間膜リンパ節転移の機序としては、腫瘍の浸潤により腸管壁へのリンパ管侵襲を起こし腸間膜のリンパ行性に広がると考察されている。直腸癌と卵巣癌の重複癌の診断がついている場合でも、術前に腸間膜リンパ節の腫大が卵巣癌によるものと推測することは難しい。卵巣癌による腸間膜リンパ節転移の可能性もあり、術後のStagingや治療方針にも大きな影響を与えるため、その診断は重要である。

一般演題 (ポスター)

2025年11月14日(金) 14:20～14:55 ポスター10

[P20] 一般演題 (ポスター) 20 症例・直腸2

座長：能浦 真吾(堺市立総合医療センター・消化器外科)

[P20-2] 妊娠中期に診断され妊娠中に術前化学療法を行った直腸癌の1例

久保 陽香, 山本 大輔, 齊藤 浩志, 道傳 研太, 崎村 祐介, 齋藤 裕人, 辻 敏克, 森山 秀樹, 木下 淳, 稲木 紀幸
(金沢大学附属病院消化管外科)

【背景】妊娠合併の大腸癌は10万例の妊娠に対し1-2例と稀であり、標準治療が確立されていないのが現状である。今回我々は、妊娠中期に診断した直腸癌 Stage IIに対して術前化学療法を施行し、胎児発育後に分娩を行い、その後手術を施行した1例を経験したので報告する。

【症例】36歳女性、妊娠22週。血便を主訴にS状結腸内視鏡検査を施行したところ、上部直腸に半周性の2型腫瘍を認め、生検でadenocarcinomaと診断した。全身精査では、明らかなリンパ節転移・遠隔転移は認めなかった。本人・家族、小児科医、産婦人科医とリスクベネフィットについて協議したうえで、術前化学療法を施行し、胎児発育後に分娩を行い、出産後に直腸癌根治術を行う方針とした。院内の承認を経て、術前化学療法はFOLFOXを施行し、特に有害事象なく4コース行った。最終投与から23日後の妊娠35週5日に経膈分娩し、新生児（2386 gの女児）には明らかな異常は認めなかった。分娩後27日目に、直腸癌に対してロボット支援下直腸低位前方切除術を施行した。病理学的所見は、上部直腸癌 ypT2N0M0 ypStage Iであった。術後経過は良好で術後12日目に退院した。現在母児ともに問題なく、術後6ヶ月の検査も問題なく再発所見は認めていない。

【結論】妊娠合併の大腸癌では、腫瘍の部位や病期、妊娠週数、胎児と母体の状態を考慮し、治療方針を決定することが肝要である。妊娠中期に診断されたStage IIの大腸癌で、外科切除がすぐにできない症例に関しても、術前化学療法を行うことは治療選択肢のひとつになると考えられる。

一般演題（ポスター）

2025年11月14日(金) 14:20～14:55 10 ポスター10

[P20] 一般演題（ポスター） 20 症例・直腸2

座長：能浦 真吾(堺市立総合医療センター・消化器外科)

[P20-3] 経肛門・経会陰アプローチによる直腸GIST・直腸膀胱瘻手術

佐村 博範, 新垣 淳也, 堀 義城, 山城 直嗣, 藤井 克成, 宮城 由依, 原田 哲嗣, 本成 永, 金城 直, 伊禮 俊充, 亀山 眞一郎, 伊志嶺 朝成, 長嶺 義哲, 古波倉 史子 (浦添総合病院)

【はじめに】GISTや直腸瘻孔に対しては一般的に経腹的アプローチが施行されているが、我々は経肛門的経会陰的に必要に応じて鏡視下に施術しているので報告する。【対象】女性直腸GISTのべ4例（再発1例）、前立腺術後の直腸膀胱瘻2例に対し経会陰的手術を施行した。また、男性直腸GIST1例に腹腔鏡手術と経肛門的鏡視下手術を施行した。【方法】経会陰的アプローチ：女性GIST）肛門腔口間に約5cmの横切開を置き、膣背側で切開を進め会陰横筋前で骨盤腔に入りGISTのみ（再発例は一部直腸壁）を切除した2例は（鏡視下で施行）。直腸膀胱瘻2例は同じく約5cmの会陰横切開をおき、会陰横筋の背側で骨盤底に入り膀胱直腸間を剥離し瘻孔をそれぞれ閉鎖し臀溝皮弁を間置した。男性直腸GIST例は腹腔鏡下に可能な限りGISTを授動した後、経肛門鏡視下で直腸壁を切開し一部直腸壁を付けて切除し、経肛門的に摘除した。【結果】GIST例は58ヶ月以上経過しており再発は認めていない。直腸膀胱瘻に2例は前医にてフォロー中であるが再発していない。合併症は3例にあり、再発GIST症例で縫合不全を発症したが再縫合とドレナージで治癒した。直腸膀胱瘻の一例は再発したが再度閉鎖を施行し治癒した。男性GIST症例は4年後に直腸膀胱瘻を発症し、現在治療計画中である。【結語】経肛門会陰アプローチはGISTや直腸膀胱瘻に有用なアプローチと思われる。

一般演題（ポスター）

2025年11月14日(金) 14:20～14:55 ⑤ ポスター10

[P20] 一般演題（ポスター） 20 症例・直腸2

座長：能浦 真吾(堺市立総合医療センター・消化器外科)

[P20-4] 膣ヒアルロン酸注入療法により発生した直腸肛門部合併症の3例

新谷 裕美子, 大城 泰平, 井上 英美, 西尾 梨沙, 古川 聡美, 岡本 欣也, 山名 哲郎 (JCHO東京山手メディカルセンター大腸肛門病センター)

【はじめに】

膣ヒアルロン酸注入療法は、更年期障害、膣乾燥、性交時の不快感や性感低下などの改善を目的として、一部の美容外科や婦人科クリニックにおいて自由診療で実施されている。しかし、国内における施術件数や実施施設に関する統計は存在せず、全国的な普及状況は不明である。また、日本産婦人科学会や美容外科学会などの主要学会から本療法に関する公的なガイドラインや推奨は発表されておらず、安全性や有効性に関するエビデンスも限定的である。今回我々は、膣ヒアルロン酸注入後に直腸肛門領域に重篤な合併症をきたした3症例を経験したため報告する。

【症例提示】

症例1：30代女性。美容外科にて膣ヒアルロン酸注入を施行。翌日に発熱、肛門周囲の疼痛と腫脹を自覚したが、施術医より合併症との指摘はなく、近医で抗菌薬治療を受けた。症状は改善せず、施術17日後に当科受診。MRIにて両側坐骨直腸窩に膿瘍形成を認めた。腰椎麻酔下にドレナージ術を施行し、術後6日目に退院した。

症例2：30代女性。施術直後より肛門痛を自覚。近医で抗菌薬治療を受けるも軽快せず、10日目に当科受診。MRIで膣壁と直腸間隙に膿瘍を認め、全身麻酔下に経直腸的骨盤内膿瘍ドレナージ術を施行。術中、膿瘍が直腸へ穿破していることを確認。直腸腔瘻に対してTPN管理を行い、術後16日目に退院した。

症例3：50代女性。施術後、10日間にわたり発熱が持続したが自然軽快。2ヶ月後に大腸内視鏡検査で直腸粘膜下に膿瘍形成を指摘され、当科紹介受診。MRIで直腸粘膜下膿瘍と診断された。

【まとめ】

膣ヒアルロン酸注入療法は美容目的の情報発信でその有用性が強調される一方、重篤な合併症については知られていない。当治療を施行する医療提供者は本報告のような直腸肛門部に深刻な合併症を生じる可能性があることを患者に情報提供する必要がある、また大腸肛門病専門医も膣ヒアルロン酸注入療法の合併症を認識する必要がある。

一般演題 (ポスター)

2025年11月14日(金) 14:20 ~ 14:55 10 ポスター10

[P20] 一般演題 (ポスター) 20 症例・直腸2

座長：能浦 真吾(堺市立総合医療センター・消化器外科)

[P20-5] 超音波内視鏡下経直腸的ドレナージによる骨盤内膿瘍の治療が奏功した2例

北浦 良樹, 王 佳雄, 長尾 晋次郎, 持留 直希, 豊田 秀一, 石川 奈美, 土居 布加志 (大阪回生病院)

【背景】憩室穿孔などを原因とした骨盤内膿瘍に対し、安全な穿刺ラインが確保できないことで経皮的アプローチが選択できない症例を多く経験する。このような症例に対し、超音波内視鏡を用いて経腸ドレナージを行って治療効果が得られたという報告もある。しかし未だ報告例は少なく、一般的な手技とは言い難い。今回、我々は経皮的アプローチが困難な骨盤内膿瘍を有する2症例に対して超音波内視鏡下経腸ドレナージを行って良好な結果を得ることができたため、文献的考察を加えて報告する。【方法】抗生剤抵抗性の骨盤内膿瘍形成症例に対して経腸的ドレナージを行い、炎症反応・発熱・画像での縮小程度・再発有無を評価した。【結果】1例目は腹痛を主訴に近医を受診。CTでfree airを指摘され当院を紹介となった69歳女性。free airは微量であり、膿瘍も限局していたことから保存加療を選択。抗生剤投与で腹痛および炎症反応は改善したが、膿瘍縮小得られず。経腸的にENBDチューブ、ERBDチューブを膿瘍内に留置し、洗浄することで早期に膿瘍は消失した。2例目は高位筋間痔瘻に起因する直腸周囲膿瘍を有する76歳男性。経皮的ドレナージが困難であり、経腸的にdouble pig tailを留置。ドレナージ良好で膿瘍は速やかに消失した。【考察】超音波内視鏡を用いた経腸ドレナージは低侵襲で有効な治療法であり、従来の外科的介入に比べて患者の回復が早いことが利点である。また、骨盤内膿瘍の位置や大きさに関わらず施行可能であり、予備能の低い患者にも良い適応となると考えられた。【結語】本法は日本における症例報告がまだ限られているため、今後さらなる研究と臨床データの蓄積が求められる。